

関係者の証言が 一番の証し

6人の振り袖姿の少女が写真に納まる。向かって一番右に写るのが、駒ヶ根市中沢の小出富貴子さん(92)。当時14歳。疎開して来た登戸研究所の関係者が、持参した振り袖を近所の少女に貸した。日付は1947(昭和22)年の正月。秘密組織とされた登戸研究所だが、終戦後も関係者が中沢に住み続けていたことや、地域住民と良好な関係を築いていたことがうかがい知れる。

登戸研究所はスパイ活動や破壊、錯乱、暗殺などの秘密戦を担う研究、開発組織として戦前に旧陸軍が設置。爆弾や生物兵器、偽札製造などを行った。本土決戦に備えるため、太平洋戦争末期の45(昭和20)年に上伊那などに疎開したとされる。証拠隠滅のため終戦とともに文書や資料が焼却されたことから、研究会は関係者の証言を一番の証しとして、聞き取り調査を重視

かせてもらう。根気のいる作業だ。

親世代の代弁者に

伊藤さんの父親は教師だった。戦中、戦後に教壇に立ち、軍国教育、平和教育の両方に携わった。伊藤さんは「話したくても話せないことがあったと思う」と思いをはせる。「私たちの親の世代は、戦争でいろいろな体験をしたからこそ、口をつぐむ人も少なく

なかった。私たち子どもの世代が親世代の代弁者や語り部となって、平和の大切さを語り継いでいかなければ」と聞き取りを続ける理由を話す。

「最近の世界情勢を見ると、かつての戦前のおいがる。若い人には敏感に感じ、平和への関心を高めてほしい」とも。「まだまだ新しい証言や史実が出てくる。この地域で何があったのか。住んでいた人たちの思いとともに明らかにして、次世代に示していきたい」と力を込める。5月28日、4回目となる小

2度目は世間話。3度目から所の話は相手が話しだすまで待つ。確度を高めるため、

1 聞き取り調査

している。中心になって聞き取り調査を続ける共同代表の伊藤一幸さん(76)＝宮田村北割＝は、「歴史を受け継ぐ責任」を背負いながら、これまで20人以上から話を聞いてきた。駒ヶ根市の中沢国民学校(現中沢小学校)で学徒を動員して「ハリユウ」と呼ばれる缶詰型爆弾を作っていたことや、飯島町の飯島国民学校(現飯島小)で終戦後も化学実験を行っていたこと、猛毒のシアン化カリウム(青酸カリ)の瓶を目にして驚いた一などの証言を得た。

戦争体験者の高齢化が進む。証言が正確とは限らない。記憶が美化されたり、事実と異なったりすることも。「戦争は悲しい体験。やむを得ないこともあった」と伊藤さん。そうした事実をどう話してもらうか、心を砕いてきた。1度目はあいさつ程度。



終戦直後の写真について、小出富貴子さんから聞き取りを行う共同代表の伊藤さん(5月28日)

事実どう話してもらおうか

影された当時の様子やほかの少女の名前、小出さんとの関係などをまとめた文章を、小出さんと一緒に確認した。当時は、高等科2年生が中沢国民学校で爆弾製造に従事したが、1年生だった小出さんは汗を流す日々を過ごした。そんな思い出や、小出さんが覚えていた「米英撃滅の歌」や当時の流行歌の話題で談笑した。

そして、伊藤さんは「来ますね」と笑顔で声を掛け、小出さん宅を後にした。

太平洋戦争末期、上伊那地方で秘密戦兵器・資材を研究・開発していた旧陸軍登戸研究所。1989年に発足した地元赤穂高校(駒ヶ根市)の生徒による平和ゼミナールの調査で、その存在や活動内容が明らかにされた。2018年から地元有志による登戸研究所調査研究会がその活動を受け継ぎ、調査や事実の発表を続ける。終戦から80年。地域の記憶をどう後世に伝えていくのか。活動する姿を追った